

# 19世紀後半のパリにおけるカトリック教会と入移民

## —— 地方出身者を中心に ——

長 井 伸 仁

### はじめに

本稿は、ローカリティ<sup>(1)</sup>という視点から19世紀後半のパリ社会のあり方に迫ろうとする試論である。具体的には、(1) パリにおける人口動態と空間的流動性を、先行研究を整理しつつ把握する。その上で、(2) 入移民とくに地方出身者とカトリック教会のかかわりを検討する。(1)は、転居や職住間の距離などを手がかりにローカリティの持つ重みを間接的に推測するものである。また(2)は、ローカリティに代わりうる結合原理の存在を考察するものである。なお19世紀後半を取り上げるのは、この時期に首都の人口増加と出身地の多様化が顕著になり、ローカリティが変容を被ったと考えられること、また共和政による国民統合が進み、文化的多様性が政治問題になること、の2点におもによる。入移民のなかで地方出身者に注目するのは、ローカリティのあり方を見るには流入人口の圧倒的多数を占める地方出身者を対象とする必要があるからである。

一般に、近代以降の都市では空間にもとづく人的結合が希薄で、ローカリティが大きな意味を持たないという印象がある。ここで対象とするパリでも、たとえば行政区分としての街区は、近世においては税負担者や兵士の数によって分かれたれ、内部では相当の共同性を持っていたが、近代以降はそうした共同性が薄まり、行政単位としての役割も低下した<sup>(2)</sup>。ただし、それが即ローカリティの空洞化を意味するのかどうかは明らかではない。そのような問いに答える手がかりと見通しを少しでも得ることができれば、本稿の目的は達成されたと考えたい。

### 1. 19世紀後半のパリにおける人口移動と空間的流動性

人口学的にみた場合、19世紀後半のパリは、入移民の多さ、空間的流動性の高さの2点によって特徴づけられる。

## (1) 入移民

ルイ・シュヴァリエが半世紀以上前に公表した歴史人口学的研究<sup>(3)</sup>いらい、パリの人口は19世紀を通じて増加の一途をたどったこと、そのおもな原因は域外からの人口流入であったこと、が実証されている。1801年に54.6万人だった市域の人口は100年後には271万人に達した。市域が拡大した1861年からの半世紀足らずのあいだだけでも、増加分は100万人を超えているが、その1/4が自然増、3/4が社会増によるものとみられる。その結果、首都人口のなかでパリ生まれが占める割合は1/3にすぎず、域外出身者が2/3を占めていた。彼らの出身地方は、世紀前半まではパリを中心としたフランス北東部と、リムーザンやオーヴェルニュなど中央山塊の諸地方が中心だったが、世紀後半に入るとより拡散する。また外国人は、1891年にはパリ人口の7.5%を占めていた。このように、出生者という意味でのパリジャン・パリジェンヌはつねにマイノリティだったのである。

## (2) 空間的流動性

域外からの人口流入が大規模だった一方で、市内での空間的流動性も高かった。この問題についてはアラン・フォールが実証的な研究を積み重ねているので、それにもとづいて確認してみたい。たとえば、パリ市の選挙人名簿には1891年時点で約470,000人が記載されていたが、このおよそ18%にあたる83,000人が1年後の1892年には同じ街区にはいなかった<sup>(4)</sup>。よりミクロな事例をみると、市内南東部の第13区に位置するナショナル街に1896年に住んでいた715人のうち、343人はそれから10年のあいだに区を出て行って戻らず、また167人は同じ期間に区内で転居していた。10年間、住所を変えなかったのは79人のみであり、平均すれば住民は4年ごとに引っ越していた計算になる<sup>(5)</sup>。さらには、居住地と職場の距離も大きかった。20世紀初頭、市内北東部の第19区では、職場と同じ街区に住んでいたのは（企業によって異なるが）10～47%、同じ区に住んでいたのは30～76%、市内中心部の第3区ではそれぞれ6～14%と12～26%だった<sup>(6)</sup>。労働者はふつう徒歩で通勤し、片道に30分から1時間かけていた者が多かった。職住接近が支配的な就業形態だったわけではないのである<sup>(7)</sup>。

空間的流動性が高く、職場と住居が離れていたというこれらの知見は、ローカリティの空洞化を示唆する。もちろん、近隣の共同性が皆無だったわけではない。フォールによれば、「互いに知っている範囲」という意味での「街区」は日常生活の基本的な枠組みであったという。料理は各家庭で作られていたわけでは必ずしもなかったし、集合住宅の門番や近所の女性が子守をすることも日常茶飯だった。20世紀初頭のパリを知る高齢者を対象にした聞き取り調査でも、そうした意味での「街区」はしばしば「村」になぞらえられていた。

このような近隣の共同性は、ほんらい、空間的流動性の高さと相容れないものではない。だが、19世紀後半のパリでは両者の併存を困難にする要素があった。言語の多様性である。

おおよそ第一次大戦期まで、フランスでは言語的な多様性が著しかった。たとえばブルターニュ地方のフィニステール県では、20世紀初頭でも（つまり初等教育を義務化したフェリー法制定から20年以上を経ても）成年の過半数がフランス語の基本的な表現さえわからず、子どもの多くは小学校入学時点ではフランス語をいっさい知らなかったという<sup>8)</sup>。したがって、地方出身者を多く抱える巨大都市は言語的ひいては文化的にかなり不均質だったはずである。このことを考慮すれば、アトム化されていたとは言わないまでも、相当に細分化されていた都市社会像が浮かび上がってこざるをえない。

だとすれば、何が都市社会を支えていたのか。ローカリティの持つ意味が弱かったにしても、都市社会を支える別の原理があったのではないだろうか。

地方出身者の存在形態を見るうえでは同郷人のコミュニティが一つの手がかりになるが、その研究は1970年代から80年代にかけてピークを迎えた。その金字塔ともいえるレゾン＝ジュルド『19世のパリにおけるオーヴェルニュ人コロニー』（1976年）は、オーヴェルニュという一地方を枠とした同郷人たちの強力なネットワークを浮き彫りにするものだった。だが、90年代に入って、選挙人名簿や徴兵文書を利用した歴史人口学的研究が進むにつれ、こうした見方は根本から修正されるようになり、入移民の大半が市内に散住していたこと、婚姻においても非同郷婚が支配的だったこと、などが実証されている<sup>9)</sup>。地方出身者のネットワークも、レゾン＝ジュルドが詳細な研究をおこなったオーヴェルニュ人のように強い結束を誇り政治的影響力を行使していた場合もあるが、そうしたつながりに参加しない人びとの方がはるかに多かった。同郷会は、パリでは19世紀前半から設立がみられ、県ないし県を超える地方レベルのものを中心に、1880年代から叢生した<sup>10)</sup>。同時代人の証言によれば、慈善事業をおこなっているものに限っても1910年頃で300ほどを数えたという<sup>11)</sup>。しかしながら、協会の活動がつねに活発だったとは言い難いし、多くは2～300名ほどの会員しか有さず、全体としてもパリ在住の地方出身者の1/10ほどしかカバーしていなかった。同郷人のコミュニティがローカリティに代わるネットワークとして広がっていたわけではなかったのである。

とはいえ、19世紀後半という時代状況を考えると、入移民がみな、まったく個別にパリ社会に存在していたとは考えにくい。多くの人びとは、さまざまな「受け皿」を経つつ、都市社会に（統合といわないまでも）定着していたのではないだろうか。そ

れが同郷という紐帯でないとすれば、身近な血縁か、宗教か、職場での連帯か、政治的な結合か。それとも、ほんとうに相互の関係性を欠いた共存、紐帯のない社会だったのか。

本稿では、このうち宗教という要素に注目し、地方出身者と教会がどう関わっていたのかという点に目を向けたい。

19世紀後半のフランスでは、一部の時期をのぞいて、国家が世俗化を進めようとしていた。いっぽうパリでは非キリスト教化が（少なくとも脱教会化という意味では）かなり進んでおり、1889年の復活祭聖体拝領率は市内で15%、郊外では8～9%だった。それでも、当時のフランス社会においてカトリック教会は地方の言語・文化の擁護者たろうとし、またそのようにみなされてもいた。だとすれば、パリに流入していた膨大な数の地方出身者は、未知の地で生きてゆくうえで教会を頼ることができたのではないか。教会が地方出身者をパリ社会に統合しようとしたかどうかはともかくとして、地方出身者の独自性を擁護し、それが結果的に彼らの「受け皿」として機能し、都市社会の安定にいくばくか寄与したのではないか。教会という存在に注目するのは、それゆえである。

## 2. カトリック教会と地方出身者

ここでは、地方出身者を対象とした<sup>ウーヅル</sup>慈善団体、各教区での地方出身者のあり方、の二面から考察を加えたい。

### (1) 地方出身者を対象とした慈善団体

19世紀パリの人口増はおもに地方からの人口流入によるものであったが、世紀半ばまでにはカトリック教会もこの現象を問題として認識するようになった。すなわち、パリのそれとは異なる環境に出自を持ち、伝統的な紐帯から切り離された（とみなされた）人びとを、教会につなぎ止め、さらには、共和主義や社会主義などの都市の政治的「悪習」からも守ろうとしたのである。こうした意識を背景に世紀中葉から、出身地の聖職者、あるいは末端の教区ないし教区司祭のイニシアティブによって、地方出身者向けの慈善団体が設立されるようになった。活動は、既存の教区の枠組みに依拠するか、イエズス会のような修道会に部分的に担われるかし、病人の看護、困窮者への施し、職住の斡旋などを中心にしていった。

もっとも、人口流入の規模に比べれば、慈善団体の設立は遅れ気味だった。司教区は『慈善事業要覧』なる冊子を不定期で刊行していたが、網羅的とはいえないこの資料の1867年版ではサヴォア人向け団体が、1891年版ではバス＝ブルターニュ出身者向け団体が記載されているのみであり、1912年版でようやく16団体が記載されるように

なった<sup>12)</sup>。

注意すべきはこれら団体の活動である。司教区の公報ともいえる『司教区週報』を読むかぎり、おもなものは救貧や互助など社会的領域に関わっており、文化的なものは重要な位置づけをされていなかった。もちろん、ブルターニュ出身者向けの団体が市内のさる聖堂で月2回、ブルトン語で晩課、説教、歌唱をおこなっていたなど、個々の事例についての言及はあるが、総じて目立たない。むしろ、この点については、諸団体の史料を調査してゆく必要がある。

## (2) 教区と地方出身者

同じような印象は、各教区の史料からも伝わってくる。慈善団体のような有形の組織の枠外でも、地方出身者にいかに対処するかはパリ司教区にとって重要な課題でありつづけたはずである。パリ司教区のうち、言語的に特徴を持つ地方の出身者を多く抱えていた教区を抽出し、その史料を司教座文書館で部分的に閲覧したが、地方出身者への言及があることはごくまれで、あたかもそうした特徴が存在しなかったかのようである。

けっきょく、都市社会では文化的な差異はさして問題にならなかったということなのだろうか。あるいは、文化的な差異は社会的な格差の背後に隠れてしまっていたのだろうか。これは、都市史研究にとっても近代史研究にとってもきわめて重要な問題だと思われる。

明確な答えを見いだすにはさらに研究を深める必要があるが、さしあたり、空間的なつながりでもエスニック＝カルチュラルなレベルのネットワークでもない、個人的なネットワークが大きな働きをしていた可能性があることを指摘しておきたい。

地理学者のフランソワーズ・クリビエは、国民老齢保険公庫の資料をベースに、1972年に退職して年金生活に入り、かつパリ圏に住んでいる人々について、聞き取り調査を含む詳細な研究をおこなった<sup>13)</sup>。このコーホートは世紀初頭に生まれたから本報告の対象よりは後の世代に属するが、そのライフサイクルは近現代パリの社会史や人口史について貴重な情報を与えてくれる。それによれば、圏外出身男性の59%、女性の64%が、到着時点ですでにパリに親族がいた。また、最初の仕事も男性の28%、女性の34%が親族を頼って見つけていた。とくに聞き取り調査では同郷会の役割は重要視されておらず、また、文化的な差異にはまったくといってよいほどふれられない。要するに、血縁ないしごく身近な範囲でのネットワークが決定的な役割を果たしていたケースが多いのである。

## 展 望

20年来フランスを悩ませている「スカーフ問題」がそうであるように、文化と市民社会とのかかわりは現代世界においてきわめてアクチュアルな問題だが、一世紀前のパリではそれが顕在化しなかったように見える。本稿で検討した範囲では、宗教はともかくとして、それ以外の文化的要素はさしたる重要性を持たなかった——少なくとも、政治問題化することはまれだった。もちろん、世俗共和政が確立に向かう過程ではカトリック教会と世俗派が激しく対立したのだが、パリという都市社会は文化の垣塙ないし文化共存の場だったように思える。このことをより詳細に検討せねばならない。さしあたっては、行政や警察の側の史料、さらには民間団体の史料を渉猟する必要があるだろう。今後の課題である。

〔付記〕本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号19520635、「第三共和政前半期（1870－1914年）のパリにおける地方出身者と宗教」）による研究成果の一部である。

### 〈註〉

- (1) 本稿ではこの語を空間的近接性という意味で理解する。
- (2) 近世パリの街区については、高澤紀恵氏の一連の研究を参照。
- (3) Chevalier (Louis), *La formation de la population parisienne au XIX<sup>e</sup> siècle*, PUF, 1950. 19世紀パリの人口動態については、新たな史料を利用した研究も現れてきている。たとえば、Piette (Christine), Ratcliffe (Barnie M.), «Les migrants et la ville: un nouveau regard sur le Paris de la première moitié du XIX<sup>e</sup> siècle», *Annales de démographie historique*, 1993, pp.262-302.
- (4) 当時のパリは20区、80街区からなっており、街区の平均面積はおよそ1平方キロメートルだった。
- (5) Faure (Alain), «Les racines de la mobilité populaire à Paris au XIX<sup>e</sup> siècle», in Benoît-Guilbot (Odile), dir., *Changer de région, changer de métier, changer de quartier. Recherches en région parisienne*, Université Paris-X, 1982, pp.103-119.
- (6) Faure (Alain), «Nous travaillons 10 heures par jour, plus le chemin. Les déplacements de travail chez les ouvriers parisiens, 1880-1914», in Magri (Suzanna), Topalov (Christian), dir., *Villes ouvrières, 1900-1950*, L'Harmattan, 1989, pp.93-107.
- (7) アラン・フォール「パリにおける産業雇用と労働者居住：距離の多元性、生活様式の多様性」中野隆生編『都市空間と民衆：日本とフランス』山川出版社、2006年、98頁。

- (8) Ford (Caroline), *Creating the Nation in Provincial France. Religion and Political Identity in Brittany*, Princeton University Press, 1993.
- (9) Farcy (Jean-Claude), Faure (Alain), *La mobilité d'une génération de Français. Recherches sur les migrations et les déménagements vers et dans Paris à la fin du XIX<sup>e</sup> siècle*, INED, 2003.  
そのほか、Piette (Christine), Ratcliffe (Barnie M.), *op. cit.*
- (10) ギ・バルビションによれば、地方出身者が孤立から抜け出し都市に統合される過程でアイデンティティが顕在化し、それが同郷会の叢生に関連しているという (Barbichon (Guy), «Provinciaux et provinces à Paris. Propositions pour l'analyse», *Ethnologie française*, 10-2, 1980, pp.119-127)。
- (11) Daru (le comte), «Sociétés et associations de provinciaux de Paris», *Le Correspondant*, 10 février / 25 février 1910.
- (12) *Manuel des œuvres et institutions de charité de Paris, publié par ordre de Mgr l'archevêque et par les soins de la commission des œuvres instituée à l'archevêché*, Librairie de V<sup>ve</sup> Poussielgue-Rusand, 1852 / 1867 / 1886 / 1891 / 1912.
- (13) Cribier (Françoise), *Une génération de Parisiens arrive à la retraite*, Cordes-CNRS, 1978, 468 p.; Cribier (Françoise), Rhein (Catherine), «Migration et structures sociales. Une génération de provinciaux venus à Paris dans l'entre-deux-guerres», *Ethnologie française*, 10-2, 1980, pp.137-146.